

定例記者会見

第36回南方熊楠賞について

日時 令和8年3月19日（木） 午前10時～

出席者 真砂 充敏 田辺市長
山本 良明 文化振興課長
丹田 敦 南方熊楠顕彰館 参事
横矢 啓治 南方熊楠顕彰館 主任
山田 啓介 南方熊楠顕彰館 事務員

担当課 南方熊楠顕彰館（直通0739-26-9909）

南方熊楠賞

南方熊楠翁の研究対象であった、民俗学及び博物学関係の分野において、国内外を問わず顕著な業績のあった研究者を、人文部門、自然科学部門から毎年交互に選考しています。

- ◆平成2年制定
- ◆本年36回目を迎える
- ◆昨年までの受賞者47名（本賞38名、特別賞8名、功労賞1名）



南方熊楠賞



第36回受賞者（人文の部）

のもと かんいち

野本 寛一 氏

近畿大学名誉教授

専攻：民俗学

南方熊楠賞

◆主な功績（選考報告より抜粋）

- 精力的かつ徹底したフィールドワークによる資料収集に基づいて、日本列島各地の人びとの生活史・民俗誌を描き、特に人と自然環境とのかかわりに注目した〈環境民俗学〉の領域を切り拓いてきた
- 人びとの暮らしや生業がいかに自然環境とのかかわりのなかで営まれてきたか、また、自然環境の影響を受けてどのように変容してきたのかを、現場の実態から明らかにしようとするもので、その成果は数多くの著作に結実している

民俗学における最も重要かつ基礎となる

調査研究から得られた環境に視点を置いた研究成果は、

南方熊楠賞にふさわしい

南方熊楠賞

第36回南方熊楠賞授賞式・記念講演

日時：令和8年5月9日（土）午後1時30分～

場所：田辺市役所 1階 多目的ホール

内容：1. 授賞式
2. 記念講演
「樹と森と淵の伝承
—環境保全と資源持続への示唆—」

【第 36 回南方熊楠賞受賞者】

のもと かんいち
野本 寛一 氏

近畿大学名誉教授
専攻：民俗学
奈良県奈良市在住



□選考理由（抜粋）

精力的かつ徹底したフィールドワークによる資料収集に基づいて、日本列島各地の人びとの生活史・民俗誌を描き、特に人と自然環境とのかかわりに注目した〈環境民俗学〉の領域を切り拓いてきた。「民俗の生成土壌としての環境要素」に着目し、農山漁村における具体的な民俗資料（一次資料）の集積とそれに基づき、一貫して人びとの暮らしや生業がいかに自然環境とのかかわりのなかで営まれてきたか、また、自然環境の影響を受けてどのように変容してきたのかを、現場の実態から明らかにしようとするもので、その成果は数多くの著作に結実している。以上のように、野本氏の民俗学における最も重要かつ基礎となる調査研究から得られた環境に視点を置いた研究成果は、南方熊楠賞にふさわしいものと判断する。

□生年月日

1937年 2月 14日（89歳）

□略 歴

1959年 3月 國學院大學文学部文学科卒業

1959年 4月より1988年 3月まで、高等学校教諭（国語科）を中心として、静岡県立中央図書館指導主事、静岡県教育委員会文化課主席指導主事、愛知大学文学部非常勤講師（民俗学）などを務める傍ら民俗を学ぶためのフィールドワークを続けた。

1988年 4月 近畿大学民俗学研究所助教授

1989年 4月 近畿大学文芸学部助教授本務、近畿大学民俗学研究所助教授を兼任

1993年 4月 近畿大学文芸学部教授、近畿大学民俗学研究所教授を兼任

1994年 4月 近畿大学大学院文芸学部研究科教授を兼任

2000年 4月 近畿大学民俗学研究所所長を兼任

2004年 1月～2012年 5月 柳田國男記念伊那民俗研究所所長（飯田市）

2007年 4月～現在 近畿大学名誉教授

この間、同志社大学文学部・姫路獨協大学大学院・筑波大学歴史人類学系・慶應義塾大学大学院文学研究科・新潟大学大学院人文学研究科・帝塚山大学大学院人文科学研究科・國學院大學文学部で非常勤講師として民俗学を担当した。

第36回

南方熊楠賞

記者会見資料

田辺市・南方熊楠顕彰会

【目次】

南方熊楠・南方熊楠賞について	1
南方熊楠賞運営協議会名簿	2
南方熊楠賞選考委員名簿	2
第36回南方熊楠賞（人文の部）選考報告	3
// 受賞者略歴	4
// 受賞コメント	6
トロフィー制作者略歴	7
授賞式・記念講演について	8
歴代受賞者一覧	9

南方熊楠翁は 1867 年 5 月 18 日（慶応 3 年 4 月 15 日）和歌山市に生まれ、幼時より天才の名をほしいままにし、東京大学予備門（現東京大学）に入学、2 年後退学渡航、米国各地を彷徨、高等植物から菌類・地衣類まで、さまざまな植物を採集、後英国に渡り大英博物館に迎えられ、「ネイチャー」「ノーツ・アンド・クエリーズ」に多くの論考を発表、その学識の深さは古今東西にわたり碩学の名をほしいままにする。

1900（明治 33）年帰国、1904（明治 37）年より田辺に居を定め、雑誌・新聞への投稿、変形菌（粘菌）・菌類を主とした植物の研究に没頭するとともに、エコロジー（エコロジー＝生態学）という言葉を使い、明治政府が推進した神社合祀に反対するなど自然保護に尽力した。

民俗学分野では、日本民俗学の父といわれた柳田国男氏をして「日本人の可能性の極限」と言わしめ、その学殖の豊かさから、様々な質問を受け、回答したものが往復書簡集として発行されている。

植物学分野では、新種の変形菌を多数発見し、自宅の柿の木で発見した新属新種の変形菌（粘菌）は、ミナカタの名を冠せられた。また、高等植物、コケ類、地衣類、藻類、菌類、変形菌類合わせて 3 万点以上の標本を残した。

1929（昭和 4）年、昭和天皇を神島に迎え進講、1941（昭和 16）年永眠した。

.....

田辺市と南方熊楠邸保存顕彰会（現：南方熊楠顕彰会）では、翁没後 50 周年記念事業を計画、種々様々な顕彰事業を実施した。

1990（平成 2）年 10 月 20 日、南方熊楠翁没後 50 周年記念式典を開催し、市民の誇りとして翁の偉業を称え「南方熊楠賞」を制定した。

この賞は、国内外を問わず翁の研究対象であった民俗学的分野、博物学的分野の研究に顕著な業績のあった研究者に贈り、また特別賞として翁の研究に顕著な業績のあった研究者に、それぞれ賞状（線崎稲村氏揮毫）及びトロフィー（故 建昌覚造氏制作）並びに副賞（本賞 100 万円、特別賞 50 万円）を贈るものである。

表彰は、例年、年一研究者とし、人文部門、自然科学部門から交互に選考をするものであるが、本年は、人文部門よりの受賞者選考となった。

第 36 回南方熊楠賞の受賞者選考については、選考委員会において慎重に審議、選考し、南方熊楠賞運営協議会において受賞者を「野本寛一氏」に決定した。

南方熊楠賞運営協議会名簿

会 長	真砂 充敏	田辺市長、南方熊楠顕彰会会長
副会長	曾我部 大剛	南方熊楠顕彰会常任理事、高山寺住職
監 事	神元 敦司	朝日新聞社和歌山総局長
監 事	狼谷 千歳	田辺市教育委員会教育次長

南方熊楠賞選考委員名簿

【人文の部】 ※第 36 回時

選考委員長	小松 和彦	国際日本文化研究センター名誉教授
選考委員	鈴木 則子	奈良女子大学名誉教授
選考委員	関沢 まゆみ	国立歴史民俗博物館教授
選考委員	藤橋 一也	朝日新聞社文化部大阪担当部長

【自然科学の部】 ※第 35 回時

選考委員長	石井 実	大阪府立大学名誉教授
選考委員	川井 浩史	神戸大学特命教授
選考委員	遊川 知久	国立科学博物館筑波実験植物園園長
選考委員	辻 外記子	朝日新聞社科学みらい部大阪担当部長

第 36 回南方熊楠賞選考委員会は、その受賞者として、精力的かつ徹底したフィールドワークによる資料収集に基づいて、日本列島各地の人びとの生活史・民俗誌を描き、特に人と自然環境とのかかわりに注目した〈環境民俗学〉の領域を切り拓いてきた、野本寛一氏を選考した。

野本寛一氏は、1937 年、静岡県に生まれ、國學院大學で民俗学を学び、静岡県内で高校教諭を務めた後、招かれて近畿大学文芸学部教授となり、同大学に設置されている民俗学研究所所長や柳田國男記念伊那民俗学研究所所長も務めた。また、2015 年には、「民俗学、ならびに地域文化振興」への貢献により、文化功労者に顕彰されている。

野本氏の研究は、民俗学の常道に従って、フィールドワークから得られた事実の積み重ねから民俗の変遷や未来の可能性を探るという「帰納法」である。すなわち、「民俗の生成土壌としての環境要素」に着目し、農山漁村における具体的な民俗資料（一次資料）の集積とそれに基づき、一貫して人びとの暮らしや生業がいかに自然環境とのかかわりのなかで営まれてきたか、また、自然環境の影響を受けてどのように変容してきたのかを、現場の実態から明らかにしようとするもので、その成果は『焼畑民俗文化論』（1984）や『生態民俗学序説』（1987）、『共生のフォークロア 民俗の環境思想』（1994）、『自然災害と民俗』（2013）等の数多くの著作に結実している。

戦後、近代化・都市化が列島に広く浸透するなかで、昔から続いてきた民俗が急速に消滅もしくは変容しつつある現在、実地調査から得られた、生業の技術・技能、食生活から芸能、さらに精神世界にまで及ぶ野本氏の瞠目すべき著述は、今ではまことに貴重なものとなっている。これらは、先学の民俗学者の残した記録とも照らし合わせることで、現代社会を生きる日本人の生活を反省的に考えるための手がかりとなるばかりでなく、未来の人びとのための遺産としてもその価値を今後益々高めていくことになるものと高く評価できる。

以上のように、野本氏の民俗学における最も重要かつ基礎となる調査研究から得られた環境に視点を置いた研究成果は、南方熊楠賞にふさわしいものと判断し、同氏を第 36 回南方熊楠賞受賞者に選考した。

のもと かんいち
野本 寛一氏（近畿大学名誉教授） 専攻：民俗学

<p>略 歴</p>	<p>1959年3月 國學院大學文学部文学科卒業</p> <p>1959年4月～1988年3月 高等学校教諭（国語科）を中心として、静岡県立中央図書館指導主事、静岡県教育委員会文化課主席指導主事、愛知大学文学部非常勤講師（民俗学）などを務める傍ら民俗を学ぶためのフィールドワークを続けた。</p> <p>1988年4月 近畿大学民俗学研究所助教授 1989年4月 近畿大学文芸学部助教授本務、近畿大学民俗学研究所助教授を兼任 1993年4月 近畿大学文芸学部教授、近畿大学民俗学研究所教授を兼任 1994年4月 近畿大学大学院文芸学部研究科教授を兼任 2000年4月 近畿大学民俗学研究所所長を兼任 2004年1月～2012年5月 柳田國男記念伊那民俗学研究所所長（飯田市） 2007年4月～現在 近畿大学名誉教授</p> <p>この間、同志社大学文学部・姫路獨協大学大学院・筑波大学歴史人類学系・慶應義塾大学大学院文学研究科・新潟大学大学院人文学研究科・帝塚山大学大学院人文科学研究科・國學院大學文学部で非常勤講師として民俗学を担当した。</p> <p>■受賞歴</p> <p>1985年5月 高崎博士記念賞（『焼畑民俗文化論』に対して・國學院大學） 1986年1月 第5回風土研究賞（『焼畑民俗文化論』に対して・日本地名研究所） 2000年3月 第10回高知出版学術賞（『人と自然と 四万十川民俗誌』に対して・高知市文化振興財団） 2012年4月 旅の文化賞（旅の文化研究所） 2015年11月 文化功労者 2016年3月 有栖川宮記念賞（國學院大學） 2017年11月 瑞宝重光章</p>
<p>学 位</p>	<p>文学博士（民俗学・筑波大学-1988年）</p>
<p>研究活動</p>	<p>■民俗学研究および関連活動</p> <p>『静岡県史』民俗部門編さん専門委員 静岡県『引佐町史』民俗編執筆委員 静岡県『本川根町史』民俗編責任編集者 静岡県『藤枝市史』民俗担当専門委員 三重県『上野市史』民俗編代表委員 愛知県『豊川市史』民俗編編集委員 静岡県文化財保護審議会委員 大阪市文化財保護審議会委員 国立歴史民俗博物館運営協議員</p>

	国立歴史民俗博物館リニューアル展示委員 大阪府立近つ飛鳥博物館運営協議委員会委員 文部科学省科学研究重点領域研究「日本人及び日本文化の起源に関する学際的研究」共同研究員 国際日本文化研究センター事務局 日本学術会議 文化人類学・民俗学連絡委員会委員 ほか
主要著書	『大井川——その風土と文化』 野本寛一 静岡新聞社 1979年 『焼畑民俗文化論』 野本寛一 雄山閣出版 1984年 『生態民俗学序説』 野本寛一 白水社 1987年 『軒端の民俗学』 野本寛一 白水社 1989年 『熊野山海民俗考』 野本寛一 人文書院 1990年 『稲作民俗文化論』 野本寛一 雄山閣出版 1993年 『海岸環境民俗論』 野本寛一 白水社 1995年 『人と自然と 四万十川民俗誌』 野本寛一 雄山閣出版 1999年 『庶民列伝——民俗の心を求めて』 野本寛一 白水社 2000年 『山地母源論1・日向山峡のムラから』 野本寛一 岩田書院 2004年 『栃と餅——食の民俗構造を探る』 野本寛一 岩波書店 2005年 『民俗誌・女の一生——母性の力』 野本寛一 文春新書 2006年 『神と自然の景観論——信仰環境を読む』 野本寛一 講談社 2006年 『生態と民俗——人と動植物の相渉譜』 野本寛一 講談社 2008年 『山地母源論2・マスの溯上を追って』 野本寛一 岩田書院 2009年 『地霊の復権——自然と結ぶ民俗をさぐる』 野本寛一 岩波書店 2010年 『食の民俗事典』 野本寛一 (編) 終風舎 2011年 『自然と共に生きる作法——水窪からの発信』 野本寛一 静岡新聞社 2012年 『日本の心を伝える年中行事事典』 筒江薫、谷阪智佳子、岩城こよみ (著), 野本寛一 (編) 岩崎書店 2013年 『自然災害と民俗』 野本寛一 森話社 2013年 『牛馬民俗誌』 野本寛一 岩田書院 2015年 『季節の民俗誌』 野本寛一 玉川大学出版部 2016年 『近代文学とフォークロア』 野本寛一 白地社 2016年 『民俗誌・海山の間』 野本寛一 岩田書院 2017年 『生きもの民俗誌』 野本寛一 昭和堂 2019年 『近代の記憶——民俗の変容と消滅』 野本寛一 七月社 2019年 『採集民俗論』 野本寛一 昭和堂 2020年 『自然暦と環境口誦の世界』 野本寛一 大河書房 2021年 『言霊の民俗誌』 野本寛一 講談社 2021年 『井上靖の原郷——伏流する民俗世界』 野本寛一 七月社 2021年 『麦の記憶——民俗学のまなざしから』 野本寛一 七月社 2022年 『飽食以前——イモと雑穀の民俗』 野本寛一 終風舎 2023年 『新修 民俗語彙』 野本寛一 終風舎 2024年 『民俗・まなびの径 珈琲と樺』 野本寛一 七月社 2025年

野本 寛一

自然とともに生きた知の巨人南方熊楠一。その名を冠した賞の受賞者として推挙されたという報に接しました。まず、己の学びの狭さ、浅さが自省され、過分なことだと緊張いたしました。私は全国各地に生きる人びとの暮らしや生業に関わる民俗の学びを続けてきました。その中で、暮らしや生業と自然環境との緊密な関係に注目するようになったのです。それは「環境民俗」の探索でもあります。しかし、その歩みは遅く、途半ばの状態です。こうした活動に目をとめてくださった田辺市当局・南方熊楠顕彰会、選考委員会の方々に心より感謝申し上げます。もとより、様々な体験や伝承をお聞かせくださった各地の人々のお力があつてのことです。

地球温暖化に連動して海・山の環境変化が進み、また一方では山村・海村の過疎化や少子化が顕著です。廃絶した集落で、祭る人・参る人を失った小祠や小社をいくつも目にしました。こうした時代状況なればこそ、熊楠翁のごとき深い思索に根ざした発信力が必要なのだと思います。老骨ではありますが、重い賞をいただくのを機に、たとえささやかなものではあつても熊楠翁の足跡につながる発信ができるように努めたいと思います。

たてはた かくぞう
故 建 畠 覚 造

○略 歴

1919（大正8）年～ 2006（平成18）年

彫刻家。東京生まれ。抽象彫刻のパイオニアの一人。行動美術協会会員。

1941（昭和16）年 東京美術学校彫刻科卒業。第4回文展で特選。

1950（昭和25）年 行動美術協会に彫刻部を創設、会員となる。

1954（昭和29）年 ベネチアの第1回国際造型美術家会議に出席し、フランスに滞在。
日本国際美術展、現代日本美術展、集団現代彫刻展、宇部現代日本彫刻展。

1966（昭和41）年 ロダン美術館の国際現代彫刻展。

1967（昭和42）年 アントワープ国際彫刻ビエンナーレ展などに出品、抽象彫刻の展開に重要な役割を果たした。

父、建畠大夢（和歌山県有田郡清水町出身、1880（明治13）年～1942（昭和17）年、本名 弥一郎）は著名な彫刻家であり、帝展審査員を務め、東京美術学校教授、官展系の代表的彫刻家として活躍した。

○受賞歴

1941（昭和16）年 文展特選

1941（昭和16）～1942（昭和17）年 直土会賞

1943（昭和18）年 野間賞

1966（昭和41）年 国立近代美術館賞

1967（昭和42）年 高村光太郎賞

1981（昭和56）年 中原悌二郎賞

1982（昭和57）年 長野市野外彫刻賞（美ヶ原）、和歌山県文化賞

1983（昭和58）年 ヘンリームーア大賞展特別優秀賞

1990（平成2）年 第40回芸術選奨文部大臣賞

2005（平成17）年 文化功労者

○作 品

和歌山県立近代美術館、箱根彫刻の森美術館、美ヶ原高原美術館、長野市野外彫刻、東京芸術大学資料館、和歌山県国体モニュメント、東京銀行本店モニュメント、和歌山県立近代美術館モニュメント、紀南文化会館モニュメント、さいたま博シンボルタワー、東京証券取引所研修センターモニュメント、長野市制100周年記念モニュメント、東京芸術劇場モニュメント、東京都新庁舎議会棟ロビー彫刻、東京都中央海浜公園モニュメント、和歌山市制100周年記念モニュメント

第 36 回南方熊楠賞授賞式・記念講演

日 時 令和 8 年 5 月 9 日（土）午後 1 時 30 分より
会 場 田辺市役所 1 階 多目的ホール
定 員 200 名（要申込・先着）
内 容 1. 授賞式
2. 記念講演

（演題）「樹と森と淵^{ふち}の伝承 ―環境保全と資源持続への示唆―」

（講師）第 36 回南方熊楠賞受賞者 野本 寛一 氏

○申込方法

電話（0739-26-9909）または下記の専用申込フォームより受付します。



（URL）<https://logoform.jp/form/nAhC/1435474>

○お問合せ

南方熊楠顕彰会事務局

〒646-0035 和歌山県田辺市中屋敷町 36 番地 南方熊楠顕彰館内

Tel : 0739-26-9909 Fax : 0739-26-9913

E-mail : minakata@mb.aikis.or.jp

■関連イベント

南方熊楠賞記念特別公開

南方熊楠賞授賞式の開催を記念して、授賞式当日（5月9日）は、南方熊楠邸の観覧料が無料となります。

南方熊楠顕彰館は、14時に閉館（最終入館13時30分）となりますが、南方熊楠邸は、17時（最終入場16時30分）までご覧いただけます。

第1回南方熊楠賞（人文の部）

バーバラ・ルーシュ 氏 【専攻】 中世日本文学

日本中世の主要な問題点を再検討し、日本文化を創造した人々の活動を実証的に新たな視角から解明した。

第1回南方熊楠賞（自然科学の部）

神谷 宣郎 氏 【専攻】 変形菌

戦前、日本では細胞を生きたまま扱うことがほとんどできなかった時代に、粘菌を活用し、極めて独創的な方法で原形質流動の分子機構を明らかにした。

第2回南方熊楠賞（人文の部）

谷川 健一 氏 【専攻】 民俗学

長年在野にあつて研究を継続、民衆文化へ目を向け、柳田国男、折口信夫などの民俗学の成果と課題を多角的、総合的に研究。熊楠翁の視点にも論究した。民衆文化への視点を持ちながら、沖縄文化との比較研究をおこなった。

第3回南方熊楠賞（自然科学の部）

椿 啓介 氏 【専攻】 菌類

真菌類の研究で知られ、特に不完全菌類の研究に深く、その雑多な形質の中で分生子（孢子）形成様式という新分類基準を選び出し、分類体系を確立した。

第4回南方熊楠賞（人文の部）

國分 直一 氏 【専攻】 人類学・民族学

東アジアの民族文化の比較研究に取り組み、台湾などの各地の発掘調査で、多くの研究成果をあげた。

第5回南方熊楠賞（自然科学の部）

吉良 龍夫 氏 【専攻】 植物生態学

森林の生態系について観測と実験、数理的解析を加えて研究。科学的根拠を通して自然保護の大切さを訴えた。

第5回南方熊楠賞（人文の部）

鶴見 和子 氏 【専攻】 比較社会学

熊楠の博物学研究が地球規模で行われていたことに気づき、「地球志向の比較学」と題した論文を発表するなど、熊楠研究の新しい分野を切り拓いた。

第6回南方熊楠賞（自然科学の部）

竹内 郁夫 氏 【専攻】細胞性粘菌

細胞性粘菌を用いた発生生物学研究の第一人者。肉眼では見えず、生活サイクルなどが未解明の細胞性粘菌を日本で初めて研究材料として取り上げて研究の基礎を確立、発生生物学研究に多大な功績を残した。

第7回南方熊楠賞（人文の部）

川添 登 氏 【専攻】生活学

建築評論家として活動する一方、在野の研究者として都市民を対象にした新しい民俗学の分野として「生活学」を提唱、体系化した。

第8回南方熊楠賞（自然科学の部）

四手井 綱英 氏 【専攻】森林生態学

森林植生分布や里山林の起源、森林での水と養分の循環や動物の役割など、創意に富んだ研究を発表し、すぐれた研究者を育てた。

第9回南方熊楠賞（人文の部）

加藤 九祚 氏 【専攻】歴史民族学

シベリアや中央アジアなどのユーラシア内陸部全域にわたるフィールドワークをおこない、シベリアの民族に関する記録を古今東西の資料とつきあわせることによって、歴史民族学の新しい分野を開拓した。

第10回南方熊楠賞（人文の部）

上田 正昭 氏 【専攻】古代日本史・東アジア史

アジア、特に東アジアを視野に入れたスケールの大きな日本古代史の研究家。文献史学をベースとしながら、国文学、考古学、民俗学などの研究成果も取り入れ、古代社会を多面的に研究し、とくにヤマト王権成立から律令体制成立期の権力構造の分析や宗教と信仰などを主とする。またその他、その鋭い人権感覚から在日朝鮮・韓国人や被差別部落の問題にも積極的にかかわり、その問題意識から、従来の学統を総合する独自の方法で研究を大成されている。

第10回南方熊楠賞（自然科学の部）

日高 敏隆 氏 【専攻】動物行動学

日本動物行動学のパイオニア。動物行動の生理学的・行動学的・社会学的基礎を確立した意義と貢献はきわめて大きいとの世界的評価を得ている。

第 11 回南方熊楠賞（自然科学の部）

青木 淳一 氏 【専攻】昆虫（ダニ）

土壌中にすむダニの仲間の研究に半生を捧げ、日本に知られるササラダニの約半数を新種として記載。また、ダニの研究を通して環境評価や環境診断の基準の確立、日本土壌動物学の確立に大きく貢献し、各界からきわめて高い評価を受けている。

第 12 回南方熊楠賞（人文の部）

櫻井 徳太郎 氏 【専攻】民俗学

青年期に柳田国男氏に師事し、その後民俗学諸分野にわたる幅広い研究を手がける。殊に民俗宗教の分野では、民俗宗教の社会基盤を追究しての論究は学問的論争を起し、日本の学会でのシャーマニズム研究展開の軸となる業績が高く評価を得ている。受賞に際し、「日本民俗文化の特質を抽出するには、少なくとも周辺民族との比較が必要で、南方学の成果を貪り吸収した」とのコメントを寄せられた。

第 13 回南方熊楠賞（自然科学の部）

本郷 次雄 氏 【専攻】菌類分類学

1945（昭和 20）年当時、正確な同定が困難であったハラタケ目のキノコの種の特徴を正確に把握し、以来、今日まで 200 種を越える新種を記載するとともに、それを上回る数の日本新記録の新産種を報告しつづけてきた。また、その研究成果は「原色日本菌類図鑑」などで紹介され、これらの著作が日本産キノコ類の紹介に果たした功績は限りなく大きい。

第 14 回南方熊楠賞（人文の部）

佐々木 高明 氏 【専攻】民俗学

東南アジアや東アジアなどの諸国の現地調査を通し、日本人とそのアイデンティティの基礎にある日本文化の形成過程を、「稲作文化」をはじめ「照葉樹林文化」や「ナラ林文化」などの大きな文化類型を設定することにより、さまざまな形で跡づけられた。また、国立民族学博物館の創設に尽力され、その後も同館館長として民族学資料の収集と研究成果を、国内はもとより広く世界に発信し、日本における民族学研究の指導的役割を果たされた。

第 15 回南方熊楠賞（自然科学の部）

柴岡 弘郎 氏 【専攻】植物生理学

植物生理学、細胞生物学が専門。高校生の時の「向日葵は本当に廻るのか」という素朴な疑問がきっかけで植物学の世界に進まれ、「植物はどのようにして生長するのか」という最も基本的な現象のメカニズムを研究され、生理活性物質と植物ホルモンの相互作用により制御されることを解明された。常に時代を先取りする世界的な研究業績によって植物の生長生理学分野を牽引されてこられた。

第16回南方熊楠賞（人文の部）

岩田 慶治 氏 【専攻】文化人類学

1957年以來四半世紀にわたり東南アジアの稲作民族を調査、日本との比較民族学研究を行い、アニミズムの再考を提唱された文化人類学者、人文地理学者。積年のアニミズム研究から、人間にとって必要な根源的な宗教感覚ないしは宗教性を、現代に甦らせた独創的思想家で、岩田学なる独自の学問体系を確立された。

第17回南方熊楠賞（自然科学の部）

伊藤 嘉昭 氏 【専攻】生態学（昆虫学、進化生物学）

生態学や社会生物学が始動しはじめた時代に、それらの学問をいち早く取り入れ、先駆的な業績を公表し、それを一般に広く紹介した。特に、沖縄のウリミバエ対策事業にかかわり、不妊化オスの放飼による防除計画を策定、実行し、沖縄でのウリミバエの根絶に成功された業績は、生態学が社会に貢献した例として世界的にも高い評価を受けている。また、生態学者の視点と純粋な正義感から、米軍によるベトナムでの枯葉剤使用に対する反対声明や沖縄やんばるの森の自然保護活動など、常に自然保護運動に尽くされた。

第18回南方熊楠賞（人文の部）

伊藤 幹治 氏 【専攻】人類学・民俗学

丹念なフィールドワークと膨大な文献による理論研究により、日本という国の民俗文化を集中的に研究する民俗学（フォクローア）と世界の諸民族の社会や文化の比較研究を行う民族学（エスノロジー）という二つのミンゾク学の統合の中から新しい日本人・日本文化論を構築された。

それは二つのミンゾク学の交流の原点に位置し、実地調査と文献研究によりその研究を展開させてきた南方熊楠の学問研究の特質と軌を一にするものと、高く評価された。

第19回南方熊楠賞（自然科学の部）

堀田 満 氏 【専攻】植物分類学

草創期の植物分類学の気概と伝統を継承している最後の植物学者の一人。

氏の植物分類学の研究はサトイモ科から始まり、数々の分類を手がけられるとともに植物の分布形成過程を究明した植物地理学上の功績は高く評価されている。人とイモの関係に関する民族植物学の視点からの論考は、照葉樹林文化論にも大きな影響を与えた。

また、採集された植物標本は約7万点に及び、これらの標本を背景にした植物の多様性に関する圧倒的な知識に基づき、現在もなお、植物をこよなく愛し、植物を求めて各地を精力的に歩きまわり、その保護に心血を注ぐ姿は、南方熊楠翁の足跡を偲ばせる。

第20回南方熊楠賞（人文の部）

山折 哲雄 氏 【専攻】宗教学・民俗学

インドをはじめ、アジアや欧米の宗教思想史の研究を背景にして、日本の民俗文化や日本人の心の問題を広く深く考察し、その考究の深みの中から、日本人の心の問題の未来を見据えた上で、大きなスケールで情報を発信しようとしている。その研究は、欧米の思想を十分に咀嚼し、きわめて広い視野から、日本の民俗文化について考察を加え、日本人のもつ神々の問題や世界観の問題の解明に、旺盛な研究意欲をもって迫ろうとした南方熊楠の研究と通底するところが少なくない。

第21回南方熊楠賞（自然科学の部）

河野 昭一 氏 【専攻】種生物学

植物生態学、植物系統分類学の研究・教育に専念する傍ら、自ら「種生物学研究会」（のちに「種生物学会」に改称）を立ち上げ、数多くの研究者を育て上げるとともに、機関紙「種生物学研究」「Plant Species Biology」を刊行し、数多くの論文を発刊した。京都大学退官後は、日本生態学会自然保護専門委員会委員、NPO 法人地球環境大学理事長などとして、日本の自然、特に中池見湿原の保護、各地の国有林における不法伐採の摘発と保護等に大活躍している。その様子は神社合祀に反対し、活動した南方熊楠翁を髣髴とさせるものである。

第22回南方熊楠賞（人文の部）

森 浩一 氏 【専攻】日本考古学・日本文化史学

多くの著名な考古学者、歴史学者とも、若いころから交流を持ち、いろいろとアドバイスは受けてきたが、誰かを師と仰ぐことはせず、「森古代学」の探究を続けてきた。また、「考古学は地域に元気を与える学問でなければならない」と主張、研究成果を社会に還元するために労力を惜しむべきではないと、メディアへの対応をいとわないなど、調査研究の優れた業績だけでなく、執筆、講演、シンポジウムの企画立案など多彩な啓蒙活動や遺跡保存への働きかけは熊楠翁の生きざまに通じるものがある。

第23回南方熊楠賞（自然科学の部）

杉山 純多 氏 【専攻】微生物系統分類学

フィールドから分子にまで及ぶ幅広い研究を続け、菌類の多様な形態に着目するとともに、環境に応じて変幻自在に変化する菌類について、分子的解析手段を導入してその実体を明らかにし、菌類という生物の生き方の謎の解明に大きな前進をもたらした。このことは、熊楠翁の抱いていた菌類（変形菌類）の謎の解明につながるものである。

第24回南方熊楠賞（人文の部）

石毛 直道 氏 【専攻】文化人類学

食文化研究のパイオニアで、これまで学術的な研究対象となりにくかった「料理」を、それを創作し伝えている人たちの歴史、習俗、暮らし、自然環境などを網羅した生活体系の一つの「食文化」として捉え、人類史的な視野での比較文明論の主要素であることを提示した。未知の食文化を求めて世界各地を訪れ、豊富なデータを集め続けた学問への姿勢は、身近に生息する粘菌を探し求め、世界的学者になった熊楠翁に通じるものがある。

第25回南方熊楠賞（自然科学の部）

井上 勲 氏 【専攻】藻類類

学生時代から一貫して、微細藻類の系統分類学的研究を行い、また「藻類画像データ」をインターネット上に公開して、多様な藻類の世界についての新しい知識を学界・社会に普及させるなど、学術的意義ばかりでなく、啓蒙的な価値の高い研究も行っている。細胞生物学から分類学に及ぶ幅広い研究により、現代的な博物学ともいえる藻類学の分野を推進した業績は顕著であり、南方熊楠翁の博物学を髣髴とさせるものである。

第26回南方熊楠賞（人文の部）

中沢 新一 氏 【専攻】人類学

宗教学を足掛かりとして、人類学や民俗学のフィールドにも歩みを進め、現在は対称性人類学と呼称される領域を提示しており、従来の学問の枠組みにとらわれない研究成果を実現している。特に、独自のアート感覚あふれるフィールドワークの手法を用いる「アースダイバー」は、注目すべき取り組みである。思想アートとでも評すべきこの取り組みは、現代人にとって新しい知見と感性を切り開く可能性をもっていると思われる。中沢氏の独創性とトリックスター的な役割は、人文学のみならず、多くの分野に影響を与えた。

第27回南方熊楠賞（自然科学の部）

加藤 真 氏 【専攻】生態学

学生時代から一貫して、昆虫と植物など多様な生物が複雑に絡み合う共生関係を解き明かし、生態学研究を大きく発展させている。さらに、森林、干潟、湿地など様々な生態系が、多様な共生関係で成り立っていることをつまびらかにすることで、生物多様性、生態系の保全にも貢献。また、植物と昆虫の共生関係だけでなく、森林、湿地、河川、干潟、藻場など様々な生態系で、多様な生物の種間関係を調べ、学術的な意義だけでなく、保全にも役立つ情報発信を続けてきた。

第28回南方熊楠賞（人文の部）

櫻井 治男 氏 【専攻】宗教学

神社合祀問題について、三重県下を主なフィールドワークの対象として「行政村」単位での合祀の事情を具体的に明らかにするとともに、従前ほとんど注目されていなかった、合祀後の地域社会の様相や祭礼行事の持続と変容の内容を解明することに独自の視点を据えて、その結論を導き出している。

第29回南方熊楠賞（自然科学の部）

馬渡 駿介 氏 【専攻】無脊椎動物分類学

一貫して無脊椎動物の種分類学に関する研究に邁進し、特に苔虫動物門に属し淡水から海水に生息する、コケムシと呼ばれる群体性の固着生物の研究に注力。多くの新種を含む日本産コケムシ類の種類相を明らかにした。また、世界中のコケムシ標本との比較研究も行い、いくつかの科・属・種についての分類体系に改訂を加えた。広範な無脊椎動物についてフィールドにおける丹念な調査・研究に基づき種を記載・分類するという姿勢は、熊楠翁の精神に通じるものがある。

第30回南方熊楠賞（人文の部）

北原 糸子 氏 【専攻】歴史学（災害社会史）

災害社会史という知の新たな領域の開拓者であり、災害時における人間行動の研究や情報メディアの社会史的な分析は先駆的な研究として評価されている。また、災害史を歴史学だけの専有物とすることなく、理工学分野の研究者との協同において切り拓いてゆこうとする姿勢が、災害研究分野における「文理融合」の起点の一つになったといえる。東日本大震災後に何度も被災地に足を運び、調査を行う北原氏の姿には、在野の研究者であり、フィールドの人であった南方熊楠を思い起こさずにはいられない。

第31回南方熊楠賞（自然科学の部）

山極 寿一 氏 【専攻】人類学（霊長類学）

大学院在学中にニホンザルの形態特性の変異を調べることから人類学、特に霊長類学研究を開始した山極氏は、その後、研究の場をアフリカに移し、時にはゴリラ語を駆使しながらゴリラの群れに接触した結果、ゴリラの多様な行動様式や社会関係を明らかにした。また、研究活動のみではなく、ゴリラと人間との共存を目的とした基金の設立、ゴリラを中心としたエコツーリズムの可能性についての模索など、その活動は多岐にわたっている。徹底したフィールドワークを行い、自然のサルやゴリラの群れの懐に飛び込むことにより、多くの新知見を得、さらにはゴリラの保全活動等にも取り組む姿勢は、熊楠翁の精神を彷彿させるものである。

第 32 回南方熊楠賞（人文の部）

江原 絢子 氏 【専攻】食文化史

調理という作り手の視点から日本の食文化を深く探求することにより、日本における食物史を開拓し、「和食文化」を学術領域として確立することに大きく貢献した。さらに、功績として特筆すべきは、学会活動を先導し、地方、女性、次世代の研究者養成に大きく寄与している点である。人びとの暮らしのまわりに広がる文化に対して文献渉猟と現地観察を徹底するというスタイルをとっており、その点で南方熊楠の精神に大いに通じていると言える。

第 33 回南方熊楠賞（自然科学の部）

塚谷 裕一 氏 【専攻】植物学

東南アジアの熱帯林をはじめとする国内外でのフィールドワークを通じて、菌根を介して完全に栄養を菌類に依存する「菌従属栄養植物」など、1 つの新属、30 の新種を含む 44 の植物の新分類群を命名したほか、最先端の分子レベルの植物学の研究においても、葉の形態がどのような分子遺伝学的仕組みによって形づくられるかを理解する上での基本といえる「ルール」のいくつかをモデル植物をつかって明らかにし、葉の形態形成における遺伝子経路の解明において世界をリードする研究成果を多くあげてきた。これらの成果は現代のナチュラルヒストリーとして高く評価される業績であり、またその研究成果や植物誌を広く一般に普及する精力的な執筆活動は、熊楠翁に通ずるものがある。

第 34 回南方熊楠賞（人文の部）

松岡 悦子 氏 【専攻】文化人類学

現在の日本社会における最大の課題とも言える、〈妊娠・出産〉に関して、民俗学的研究を継承しつつ、家族やジェンダーの問題として取り上げ、さらに医療化にはらむ問題を、国際的な比較を通じて論じてきた。また、著書のほかに、論文もきわめて多く、さらに看護学や助産学、社会学など多様な分野の研究誌に掲載されていることは、松岡氏の学術的インパクトの大きさを示している。そういった松岡氏の研究は、民俗学の現代的展開として、南方熊楠賞にふさわしいと判断する。

第 35 回南方熊楠賞（自然科学の部）

松浦 啓一 氏 【専攻】魚類学

動物分類学者として、国立科学博物館において一貫して真骨魚類の系統や分類、生物地理、生態に関する研究に従事してきた。出版物には児童向け、一般向けの図鑑や普及書も多く含まれ、一般市民の魚類の多様性や生態への関心を高めるほか、同分野の後継研究者の育成の上でもきわめて大きな役割を果たしている。生物多様性研究の発展に寄与するさまざまな活動を行ってきたとして、南方熊楠賞にふさわしい研究者であると評価する。

歴代南方熊楠賞（特別賞）受賞者一覧

南方熊楠特別賞 第1回時

長谷川 興蔵 氏

「南方熊楠選集」・「南方熊楠日記」の編集と校訂に尽力し、南方熊楠研究の発展に大きく寄与。

南方熊楠特別賞 第1回時

小林 義雄 氏

南方熊楠翁の菌類彩色図や標本を検討し、「南方熊楠菌誌」と「南方熊楠菌類彩色図譜百選」の刊行に貢献。

南方熊楠特別賞 第7回時

カルメン・ブラッカー 氏

英国民俗学会長の就任講演で南方熊楠の研究を紹介するなど、南方学の研究と海外での紹介に大きく貢献。

南方熊楠功労賞 第11回時

樋口 源一郎 氏

日本における科学映画の第一人者で、国内外の科学映画祭において数々の賞を受賞。90歳をゆうに越えた今日でも、映画製作の第一線で活躍され、特にこの20年間ほどは、粘菌やキノコの生態、生活史の映像化に力を入れられている。

南方熊楠特別賞 第12回時

神坂 次郎 氏

自ら現地に足を運び調査研究された資料に基づき、熊楠翁の人物像を見事に浮き彫りにし、仕上げた数々の熊楠翁をテーマにした伝記小説を通じ「知の巨人・南方熊楠」の名を日本全国に知らしめた業績が高く評価される。

特に、その執筆活動及び卓越した作品の中でも、「縛られた巨人 南方熊楠の生涯 (S62)」は熊楠ブームの火付け役となる等、熊楠翁顕彰に果たした役割は大きい。

南方熊楠特別賞 第13回時

後藤 伸 氏

文系の視点による翁の業績への研究が多数を占めていたなか、自然科学者の視点からその研究に取り組み、自らのフィールドワークを通じて、翁が行った神島を始めとする南紀の植物生態研究を再評価し、また翁が収集した標本類の整理・研究にも多大な貢献をされた。

南方熊楠特別賞 第14回時

飯倉 照平 氏

第1回南方熊楠特別賞受賞者 故 長谷川興蔵氏とともに平凡社刊『南方熊楠全集』の刊行に携わられるとともに、『南方熊楠－森羅万象を見つめた少年』などの著書をもって熊楠翁の業績、人となりを広く世に紹介した。

また、翁の残した膨大な資料の調査を通して「南方熊楠の基礎的研究」を進めている南方熊楠資料研究会の会長として会をまとめられ、その研究業績を同会編の『熊楠研究』に報告し続けるなど、着実な成果をあげている。

南方熊楠特別賞 第23回時

中瀬 喜陽 氏

今日のように進んだ熊楠研究の基礎をつくったパイオニアの一人であり、長年地元を対象にした地域文化の研究に力を傾注してきた。翁が残した書簡や日記等の膨大な資料を根気強く解読し、また翁を知る人への聞き取りを通して、熊楠研究に次々と新資料を加えた。氏はその成果を単に著作としてまとめるだけでなく、市民や研究者を対象に熊楠自筆資料の解読講座を開き、後進の指導にも取り組んできた。さらに、研究者としての活動だけでなく、翁の顕彰事業推進にも大きな役割を果たした。

南方熊楠特別賞 第25回時

萩原 博光 氏

熊楠翁の収集した変形菌類（粘菌類）やきのこ類の多数の標本の整理やその難解な記載資料等の解読・公表に尽力するとともに、その業績を広く社会に発信し、翁の卓越した科学者としての側面を世に知らしめた。